

編集後記

俳句の部

堀 口 みゆき

令和六年一月一日、能登半島を中心に大地震が起りました。丁度、私は近くの神社に初詣中にて境内にいと全く揺れを感じませんでしたが、能登方面の方々のことを思うと胸が痛みます。

大変な新年の幕開けとなりましたが、地震の句を作られた方もおられると思います。俳句の読み方には独特のものもあり、地震を「ない」とも読みますので、575の音数によつて二音になったり三音になったりと音数を作品によつて選ぶ柔軟さもありません。

さて、今回、俳句の応募数は大幅に増え、今年は一四三名の参加となりました。高齢化による俳句人口の減少が嘆かれています。他ジャンルに比べると、俳句は若い方々にも、かなり浸透してきていると思います。要因としては、高校生対象の「俳句甲子園」や「プレバト」等、テレビやYouTubeでの俳句番組からの影響もあります。藤沢市俳句協会においても、

俳句を日本の伝統文化として、若い世代に引き継いで頂きたいという願いを皆、持つております。俳句が、他に比べ取り組み易いかについては、意見が分かれるかと思いますが、まず、短い言葉で表現できること。特に若年層に於て、言葉の簡略化が流行っていることも意外に関係するのではないのでしょうか？

「あけましておめでとう」が「アケオメ」「ことしもよろしく」が「コトヨロ」に短縮。本当は、もつと深いところを理解してほしいのですが、とにかく、最初は興味を持つてもらうことが大事であると思います。

海外における俳句人口が増えている理由も、シンプルな表現あたりかも知れません。最初、俳句を敬遠する理由の一つとして「決まりごとが難しい」と言つて避ける傾向がありますが、例えば季語に対して興味を持つと大変楽しいものに変化すると思います。俳句は国語の中でという固定観念を持つ方が多いのですが、季語には、動物、植物、時候、天文といった自然科学系や、地理、生活、行事といった社会科学系の要素を持つ季語など、すべての分野にわたつて、自然と触れ合い総合学習的な机上だけでない生の学習ができるのではないのでしょうか。音楽や、絵画とのコラボレーションを考へても、とても楽しく学べるはずですが、他のジャンルも含め、文芸が多くの若い方たちに継がれていくことを願つてやみません。

短歌の部

原 けい子

「文芸ふじさわ」の短歌部門、これまでは長く太田博氏の編集のもと出されて来たが、この度、彼が老齢を理由に、今集以降の編集が難しいとのことで、急遽私にお鉢が回ってきた。しかし、私とて高齢、市民短歌の選者をしていた頃とは体力も気力も共に大違い。一日一日やつの思いで生きている有様なのだ。キャパシティをすっかりオーバーすることにした次第である。

「市民短歌」の活動がなくなり、そのうちにコロナ流行の問題もあつたりで、私自身、個人的な会を細々とやっているだけになっている現在、年に二回行われていた市民短歌の大会の活気を懐かしく思い出している。

今回「文芸ふじさわ」への参加者は27名。それも私がかかわる短歌会の人たちに、やや強制的に出してもらってやっと揃った27名である。世の中進む老齡化、歌壇の世界も例外ではなく、老齡の波は容赦ない。若い人たちががんばってもらわねばとつくづく思う。先細りが目に見えている。

「文芸ふじさわ」は発表の場としてもよい機会である。短歌とは今更言うまでもないが、自分の思いを告げ

る、つまり伝達の一つの形式（手段）である。七五調によって日本語は実に流麗になる。流れるようなリズムはからだにより深く浸透して、自分の思いが相手によく伝わる。

だが、短歌の働きは伝達だけではなく、もつと多くの意義をもっている。詠む者にとつて、短歌は日記であり、自分史でもある。古い歌を読むと、ああ、あの時はあんなことがあつたんだ、あんなことを考えていたんだと、自分の生活、その時の社会情勢、世界状況あらゆることまで思い返させてくれる。

また、短歌は心の救いにもなる。何か辛い時、腹が立った時、それを短歌に吐き出すことによって、感情を和らげ、処理することが出来るのではないだろうか。その際上手下手など問題ではない。

短歌の種はどこにでもある。あなたのアンテナ次第。わかりきったことであろうが、もう一度初心にもどつて見よう。

川柳の部

宮塚 肇

今回は、四十六名の方から応募をいただきありがとうございます。うございました。

「コロナ」や「マスク」のある句が激減し、また、前年に多くあった「ウクライナ」のある句がありませんでした。四年近く続いたコロナ禍が一段落した安堵感、決して見過ごせぬ戦争とはいえ遠く離れた地でのことというどこか醒めた気持ちの表れなのでしょう。一方、チャットGPTなどで話題に事欠かない「AI」のある句が散見されました。

二〇二三年は、「地球沸騰の時代が到来した」と、国連のグテーレス事務総長が警告を発するほどの猛暑の年でした。以前、「子の電話クーラー入れろ水を飲め」という自作を新聞に川柳として投稿しました。クーラー嫌いの妻を心配する息子からの電話があったのです。残念ながら採用されませんでした。ところが、ほぼ一か月後の同じ新聞の俳句投稿欄に「子の電話冷房入れる水飲めと」が掲載されていました。下五の表現に差があるだけで、ほぼ同一です。誰でも同じ思いであることを感じると同時に、文芸としての俳句と川柳との近さを感じさせられました。

以上のことから学んだのは、特に、メディアの場合、時事問題が句の内容の主体になりがちで、川柳と俳句とを別個の文芸として捉えるのはあまり意味がないのではということ。川柳では、森羅万象を自己の喜怒哀楽の感情や思いに沿って吐き、一方、俳句では季語・切れ字に留意して詠み、五七五の韻律を持たせ短詩にするということなのでしょう。

十月には、第三十六回となるふじさわ川柳大会を藤沢市・藤沢市教育委員会の後援の下、藤沢市みらい創造財団との共催で開催しました。参加者は、前年より大幅に増え、市内外から合わせて九十二名の盛況でした。コロナ禍を経て世の中が元に戻りつつあることを実感いたしました。

今回の応募者のほとんどの方は、市内のいずれかのサークルに所属しておられます。川柳に対する市民の関心・理解とその普及という願いを込めて、個人で活動されている愛好者からの応募を増やすことも今後の課題といえるでしょう。

五行歌の部

「見ること、感ずること、思うこと」

鈴木春野

第58集「五行歌の部」にご参加いただきましてありがとうございます。

五行歌の一番の特色は、「自分の思いや感じたことを自由に表現する」ということです。思いや感じ方はその人だけのもので個性が表れます。五行歌には先生はいません。添削もありません。毎月の歌会では作品一つずつに、20年続けている人も1年の人も全く平等に、合評し合って最後に作者の歌への思いを話していただきます。合評や作者コメントをする場から話題が広がり、歌会はいつもと和やかで、それぞれの人柄、個性も伝わってきます。

「今まで色々なサークルを経験して来たが、これほど長く続けているのは五行歌だけ」と仰る方が多く、その理由は「自由な意見交換が楽しく、一人一人の個性を大事にしてくれて、歌会での歌と人との出会いが楽しみ。また歌や話の中から教わる事があって有意義だから。」と語っていて、私も全く同じ思いで続けています。

「自分の知らない所でこんな楽しいことをしていたとは！ 今までのブランクがとて口惜しい。」と仰った20年以上前の新入会員さんの言葉は忘れられません。

どこの歌会に参加するのも自由ですから、その楽しさから3つ、4つ、それ以上と複数参加している方も多く、更に、遠方に引越されたりご体調具合で出席が無理になられた場合でも、紙上歌会形式や欠席歌での参加が可能な歌会もあり、多様に対応しています。

五行歌は生活の全てが題材になりますから、歌会では時々「こんなこと、あるある」とか「私もこれを歌にしたかった」と笑い合ったり学んでいます。要は、感ずること、思うこと“で同じ物や事柄であっても見方が変われば思わぬ発見があり、人が違えばその差異は当然です。『人は考える葦である』という有名な言葉があります。人は目覚めている間は必ず何かしら考え、思い、感じているものです。それらをキャッチして自分の言葉とリズムで書き留め5行にすればもう五行歌です。難しく考える必要はありません。誰でも書けます。そんな意味から五行歌は、『心と頭の体操』になると私は思っています。

気軽に五行歌で遊び続けましょう。

現代詩の部

山田 美智子

「文芸ふじさわ」第五十八集を皆様のお手元にお届け致します。

令和五年は関東大震災から百年、東日本大震災から十二年という年でもありました。

地域防災、自主防災という防災意識の向上を目的に、自治体、学校、企業、施設等多くの団体による避難訓練はじめ各種の訓練が行われました。訓練に参加して思うのは、災害はいつ起きるか分からず、日頃からの備えと地域の方々との交流を通して、お互いが知り合う事、そして共に助け合うことが大切だという事です。あたりまえの事ですが、昨今疎かにしていた事に気づかされます。令和六年一月の能登半島地震で被災されました皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

居住地区で実施された訓練のひとつに、『救助犬訓練』がありました。救助犬協会からの参加で、災害救助犬として第一線で救助活動をされる隊員の方と救助犬の一心同体の様に見受けられる活動の一端を見学し、共助の重要性を学ばされました。救助犬とのふれあいコーナーもあり、心の癒やし（セラピー）としても活躍されているようです。

ところで藤沢で有名な「小栗判官伝説」をご存知でしょうか。鎌倉大草紙に物語が遺されています。小栗判官物語は藤沢市以外にもあるようですが、遊行寺以外に西俣野には『伝承小栗塚』の石碑があります。現在は福祉施設が建っています。『小栗判官照手姫物語』は昭和四十九年発足の西俣野史跡保存会の方々により、伝承文化として継承されてきました。

十一月には藤沢市の指定文化財に『小栗判官』伝承に関わる資料等が指定された事は大きなトピックスです。地域の歴史を後世に繋げたいという思いは大変貴重です。

文芸を志す皆様にとりましても大きな財産にもなりましょう。

コロナ禍の後、私たちはあたりまえの暮らしがいかに大切か、身をもつて学びました。家庭や地域、コミュニティの形成された社会の中で、何が大切なのかをあらためて気づかされました。未来を見据えた時、過去がどうであったかを振り返り、考える力を互いに備え、次の一歩とすべきなのでしょう。

最後に「文芸ふじさわ」第四十八集の同人作品『一本松とヴァイオリン』の鎮魂と未来へ込められた祈りを思い返しています。

随筆の部

新田 慎 二

藤沢市の図書館に行くと、「文芸ふじさわ」が置かれた書架があります。図書館によって多少の差異はあるでしょうが、おそらく10冊くらい、年ごとの「集別」に配置されています。手に取ってご覧いただきたいと思えます。毎年応募されている方は、過去の自分の作品に出会うことができます。自身の心の遍歴に触れることができるのです。それらを比較して読むのもいいでしょう。これは大変ありがたいことです。きちつと保存してくれて、気が向けばいつでも閲覧できる、このシステムを大いに利用して自らの思いを書き続けてください。

さて今回の作品を拝見しますと

・作品数は37名で、ほぼ例年規模の応募となっております。いつものように、ほとんどの方が継続投稿者で、高齢者が多い、「また今年も元気で書いた」これは素晴らしいことで、ぜひ来年も書いてください。文章を書くことは脳の活性化を促し、いつまでも若々しくあることができます。

・若い方の応募者が少ないことを危惧しています。若い人が少ないと、将来の応募者が減ってゆくことを意味

します。みなさんのまわりにいる方に、書くことをぜひおすすめしてください。若い方はSMSやSNSなどに慣れて短い文章は得意ですが、少し長い文を避ける傾向にあります。若い人たちに書く楽しさを知っていただき、いろんな人々の文章が混じりあった楽しい冊子にしたいものです。

・原稿用紙に手書きで投稿される場合、誤字脱字が増える傾向にあります。これはある程度やむを得ないことであります。パソコンで打ち込むと漢字を自動的に識別し、正しく打ち出してくれるからです。これを防ぐには、書き終えた原稿を読み返すことが大切です。読み返していると、なんとなくこの字は変だなと気づくことがあります。その場合間違いがあることがあります。

・音読することも大切です。音読することで文章のリズムが良いか悪いか気づくことができます。句読点の大切さが分かってきます。起承転結があつてリズムのある文章は、読む人をいい気分にくれます。日本語は、七五調と言つて行進曲のような調子で進むことのできる力もついています。

・なるべく文章になれるため、日記を付けるのも一つの方法です。毎日あったことや感じたことなど、これも効果のある頭の体操になります。